

氏名(本籍)	ばばひろし	馬場洋(中国)
学位の種類	博士(芸術学)	
学位記番号	博甲第6197号	
学位授与年月日	平成24年3月23日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
審査研究科	人間総合科学研究科	
学位論文題目	現代スペインのリアリズム絵画に見る題材と描画法に関する研究 -アントニオ・ロペス・ガルシア、エドゥアルド・ナランホの作品を中心に-	
主査	筑波大学准教授	博士(芸術学) 仏山輝美
副査	筑波大学教授	博士(芸術学) 岡崎昭夫
副査	筑波大学教授	博士(芸術学) 内藤定壽
副査	埼玉大学教授	吉岡正人

論文の内容の要旨

(目的)

著者は、絵画における写実表現の意義を見据え、現代に求められるリアリズム絵画の在り方を探りたいと考えている。写実的な描写に基づく絵画表現のための具体的な方法を模索し、得られた成果をもとに画家である著者の表現活動の視座を定めることが一連の研究の目的である。著者作品における制作実践を見据えて、本論においては現代スペインのリアリズム絵画に見る絵画表現の手法を明らかにすることを目的としている。

(対象と方法)

本論における現代スペインのリアリズム絵画とは、一般に「スペイン・リアリズム」「マドリード・リアリズム」と呼称される1950年代以降のスペインにおける写実絵画の潮流を指す。

本論は、主にアントニオ・ロペス・ガルシア (Antonio Lopez Garcia 1936-) とエドゥアルド・ナランホ (Eduardo Naranjo 1944-) の作品についての分析と考察を行い、彼らの作品に見る題材と描画法、並びに制作姿勢を明らかにするものである。アントニオ・ロペス・ガルシアとエドゥアルド・ナランホの作品の分析を通じて、現代スペインのリアリズム絵画に特徴的な表現内容と表現方法を明らかにすることができると著者は考えている。一連の作品分析では、著者の制作者としての描画経験をもとに、対象作品における題材の特徴や絵具の様子に見る描画法について詳細に観察している。

現代スペインのリアリズム絵画に関する先行研究や、アントニオ・ロペス・ガルシア、エドゥアルド・ナランホに関する先行研究は少ない。基本文献にふさわしい先行研究が見当たらないため、本論の考察に際しては、主に作品の実見調査、作家へのインタビュー、国内外の展覧会カタログや美術雑誌に所収された論文や記事を考察のための基本資料としている。

序章において、まず「スペイン・リアリズム」「マドリード・リアリズム」の画家たちを挙げ、彼らによる国内外の展覧会を紹介しながら、現代スペインにおけるリアリズム絵画の潮流について説明している。第1章では、アントニオ・ロペス・ガルシア作品について、実見調査に基づき制作者の視点で題材と描画法を

分析している。分析結果を基に、アントニオ・ロペス・ガルシア作品に見る表現内容と技法の変遷をまとめている。第2章では、エドゥアルド・ナランホ作品について、氏への直接インタビューと作品の実見調査に基づき、作品に見る特徴的な題材と描画法についてまとめている。第3章では、アントニオ・ロペス・ガルシアとエドゥアルド・ナランホの作品にみる相違点と共通点をまとめ、現代スペインのリアリズム絵画に見る表現の本質を導き出すことを試みている。第4章では、まず著者作品に見る題材と描画法について振り返り、現状の課題を明らかにしている。次に、著者がアントニオ・ロペス・ガルシアやエドゥアルド・ナランホの作品に見る絵画表現の手法にいかにか倣い、且つその模倣を超えていかに独自の絵画表現を展開し得るかについて述べている。

(結果)

アントニオ・ロペス・ガルシアの作品は、初期の作品に幻想的な主題による表現が見られるが、その後の作品は一貫して主観の介入を遠ざけた客観的な観察による写実表現に徹している。想定された完成というゴールに向けて描かれるのではなく、身近な題材を数年にわたって描き続けた作品は、題材に注いだ彼のまなざしと描画行為の痕跡として存在していると述べ、アントニオ・ロペス・ガルシア作品の特徴をまとめている。また、作品の実見に基づき、画表面の絵具の表情から制作プロセスを推察している。

エドゥアルド・ナランホは、身の回りのものをモチーフにした微視的な観察による写実表現、もしくは現実の風景と想起された図像の組み合わせによる画面構成によって独自の絵画表現を展開している。作品を作り上げるという創意によって完成までを完全に支配していると述べ、エドゥアルド・ナランホ作品の特徴をまとめている。さらに、スペインの伝統的写実表現を継承する圧倒的な技量がエドゥアルド・ナランホの最大の魅力であるとしている。また、作品の実見によって画表面の絵具の表情から技法のメカニズムを推察し、さらに作品画像をもとに複数のエドゥアルド・ナランホ作品に描かれている題材の同一性を細部描写の比較によって解明している。

(考察)

著者が指摘するように、アントニオ・ロペス・ガルシアとエドゥアルド・ナランホは徹底した観察に基づく再現描写によって身の回りの題材をありふれたものから特別なものへと変換する。日常の題材の表現を通して、生と死を見つめ、存在と真実の意義を問う姿勢は現代スペインのリアリズム絵画に通底する基本的な制作態度であろう。著者は、こうした制作態度に倣いつつ、さらにエドゥアルド・ナランホ作品に見られるような主観的なヴィジョンのもとに幻想と現実を組み合わせる手法を自らの作品において実践し、写実に基づく絵画表現の展開の可能性を示している。

以上の考察と実践によって、著者は、アントニオ・ロペス・ガルシアとエドゥアルド・ナランホの作品を通して現代スペインのリアリズム絵画の本質に迫り、さらに写実に基づく絵画表現の制作実践のための視座を定めている。現代スペインのリアリズム絵画に心酔しその手法を追い求めてきた著者が、自身の本質に根ざした独自の表現をいかに自らの作品に実現できるかが今後の研究課題である。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論では、研究の対象となる現代スペインのリアリズム絵画作品の実見調査を実施した上で、それぞれの作品に見る題材と描画法について、制作者の視点で著者独自の分析と考察を行っている。作品の詳細な観察による題材の細部についての比較分析と、実際の絵具の表情から読み取る描画プロセスや技法の解明は、これまでの関連資料や先行する研究では触れられてこなかった内容である。また、著者自らエドゥアルド・ナランホのアトリエを訪問し、直接インタビューを通じて、エドゥアルド・ナランホの絵画観や彼の作品に関する著者の見解について本人から得た回答は、本論を支える貴重な資料となっている。さらに、著者は自ら

の作品を対象に、制作実践を通じて写実に基づく絵画表現の可能性を探っており、本論における現代スペインのリアリズム絵画に関する分析と考察は、実際の作品制作に直結する具体的な手法の提案に至っている。考察の結果得られた知見は、写実に基づく絵画表現に取り組む多くの画家にとって制作実践の指針となり得ることはもとより、さらに絵画制作方法論の学術的進展に寄与するものと期待できる。また、著者の作品が対外的な高い評価を継続的に受けているという事実が、本研究の意義と本論にまとめた写実に基づく絵画表現の有用性を裏付けているともいえる。

平成 24 年 1 月 31 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。